

# モダリティ形式「方がいい」の形態統語的特徴

田川 拓海（筑波大学）\*

## 1. はじめに：目的と主張

本発表では、現代日本語（共通語）において「勧め」や「提案」として用いられる「方がいい」を取り上げ、拘束的（deontic）モダリティを担うモダリティ形式として（どのくらい）文法化しているか検討する。

(1) 北海道に行くなら早くホテルを予約した方がいい。

特に、形態統語的な点からこの形式がどのようなまとまりになっているのか関連する言語現象と問題点を整理する。主な主張は下記の通りである。

### (2) 本発表の主張

- a. 「方がいい」全体で拘束的モダリティとしての統語的特徴を持っていることが複数の言語現象から支持される。
- b. 拘束的モダリティの「方がいい」は形態的緊密性、音韻的緊密性のどちらについても持っているとは言えない（一語になっているとは考えにくい）。
- c. 省略現象に関する振る舞いから、動詞のタ形の「た」まで含めた「た方がいい」でまとめてモダリティ形式として機能している可能性がある。

## 2. 「方がいい」の基本的性質と先行研究における位置付け

日本語研究では「方がいい」は主な分類としては評価のモダリティとされ（高梨（2002）、日本語記述文法研究会編（2003）など）、拘束的モダリティとしての用いられ方については用法や意味の観点から言及される<sup>1</sup>。拘束的モダリティとしてのラベルは先行研究によって「忠告」や「勧め」など異なっている。

(3) 比較：高いより安い方がいいに決まっている。

(4) 忠告：そんなに頭が痛いんだったら医者に行った方がいいよ。

（グループ・ジャマシイ（2023：454））

---

\* tagawa.takumi.kp@u.tsukuba.ac.jp

<sup>1</sup> 森山（2000）では「価値判断的事態選択形式群」に分類されている。

モダリティ形式の研究では「方がいい」はそれほど取り上げられず、高梨（2002）が比較から評価への文法化について検討しているが<sup>2</sup>、拘束的モダリティとしての用法についてはそれほど詳しく論じていない。

- (5) 「ほうがいい」はもともと比較表現からなり、2つの事態を比較する用法を持つ。だが、評価的複合形式としての文法化が進んだ結果、(63)で規定したような独自の意味を持つに至っており、両者は区別が必要だということである。（高梨（2002：103））
- (6) 評価的複合形式「Pするほうがいい」（上記引用中の(63)に該当）  
：当該事態Pを望ましいものとして評価すると同時に、それと反対の事態～Pを望ましくないものとして評価する。（高梨（2002：102））

個別のモダリティ形式の研究（川端（2002, 2012）、申（2006）など）では、どのような文脈において「方がいい」が使用（不）可能か、他の類似形式との意味・用法上の異同は何かという観点からの記述・整理が多く統語的特徴についてはあまり触れられない。

日本語記述文法研究会編（2003）のごく基本的で簡潔な記述が「方がいい」の形態統語的特徴の整理としては貴重である。

(7) モダリティ形式「方がいい」の形態統語的特徴

- a. 非過去形と過去形（タ形）に接続する<sup>3</sup>
- b. 述語が否定の場合は過去形（タ形）にならない
- c. イ形容詞、ナ形容詞にも接続する
- d. 「方がいい」自体は否定にならない

（日本語記述文法研究会編（2003：102-103））

ここに挙げられている振る舞いだけを見ても、単なる名詞「方」と形容詞述語「いい」の組み合わせだけでは導けない特徴を「方がいい」全体で持っている可能性を窺わせる。

一方、Mizutani and Ihara（2021）は「方がいい」の拘束的モダリティとしての意味が「方」「が」「いい」の組み合わせから構成的（compositional）に導けるという分析を提案しており、現時点ではおそらく「方がいい」についての最も詳細な研究である。

---

<sup>2</sup> 高梨（2002：85）では「評価的複合形式は、全般的に文法化の度合いが低い」とも述べられている。

<sup>3</sup> 「方がいい」に言及する場合はほかの文献でもル形とタ形が生起可能であることと実際にはテンスの対立がないことに触れられているが、さらに踏み込んだ分析は管見の限り見当たらない。

本発表では Mizutani and Ihara (2021) の意味論的分析そのものの検討を行うことはできないが、形態統語的特徴についての記述もあるので部分的に言及する。

### 3. 「方がいい」の形態統語的特徴

#### 3.1. 拘束的モダリティ形式「方がいい」としてのまとまりを示す特徴

##### 3.1.1 述語の範疇に関する制限

まず、拘束的モダリティの「方がいい」は比較や評価の場合とは異なり、動詞述語のみを取ると考えられる。形容詞や名詞述語の場合はタ形で未来（未実現）のことを表せないからである。

#### (8) 述語に関する統語的制限

- a. 動詞述語：明日は授業に 行く／行った 方がいい。
- b. 形容詞述語：先生、今日は厳しかったので明日はもう少し  
優しい／\*優しかった 方がいいです。
- c. 名詞述語：明日友達が来たときには部屋が きれいな／\*きれいだった 方がいい。

動詞であれば状態述語でもタ形で生起可能なので、述語の意味的な性質よりも範疇による制限によるものであろう。

#### (9) 明日の朝はずっと校門の前にいた方がいいよ。

拘束的モダリティとしての意味・用法が比較／評価の「方がいい」と文脈の組み合わせのみから導けるのならこのような述語の範疇に関する制限は予測するのは難しく、拘束的モダリティ形式としての「方がいい」が範疇に関する選択制限という統語的特徴を持つ可能性を示唆する。

##### 3.1.2. 「が」の固定性

「方がいい」の「が」は他の助詞に置き換えることが難しく、形式として固定されている可能性がある。

まず、「が」を「は」や「も」などに置き換えることができない。

#### (10) 「が」が他の形式に交替不可 I : とりたて詞

明日行く方 が／\*も／\*は いい

cf. 比較：温泉はぬるい方もいい

ただしこの振る舞いについてはすでに Mizutani and Ihara (2021) による意味論的分析

が提案されており、「が」の固定性の強い証拠とまでは言えない。

また、「方がいい」の「が」は主格属格交替で「の」に置き換えることもできない。

(11) 「が」が他の形式に交替不可 2：主格属格交替

明日行く方 が/\*の いいイベント

(cf. 比較：できるだけ高い方 が/\*の いい食材)

この特徴について詳しく取り上げられてはいないが、Mizutani and Ihara (2021)の「が」が総記であるという仮定から分析できる可能性はある。比較の場合にも「の」との交替が難しいこともその仮定に合う。ただし、「方がいい」の「が」が確かに総記の「が」なのか、総記の「が」であれば主格属格交替が不可能なのかということについてはさらなる検証が必要である。

さらに、拘束的モダリティの「方がいい」の「が」は「いい」なしの応答で省くことが難しい。比較の場合には「が」がなくても容認されることと比べると、拘束的モダリティにおける「方」「が」の組み合わせの固定性を示すと考えることができる<sup>4</sup>。

(12) 「いい」を省いて応答に用いる際に「が」が脱落不可

A: 明日は開場時間ちょうどに行けば大丈夫かな。

B: もっと早く行った方\*(が)。

cf. 比較:

A: 本は買うのと借りるのどっちが多い?

B: 買う方(が)。

なお、この「が」の固定性は形態的緊密性に関わる現象と考えることもできる。

### 3.1.3. 従属性の減少

比較の場合は「方がいい」の節内で主格属格交替が可能なのに対し、拘束的モダリティの場合は不可能である。これは「方がいい」全体で拘束的モダリティ形式としてのまとまりになっている（主節化）ことを支持する（cf. 大島（2010）の従属性）。

(13) 「方がいい」節の従属性

明日は太郎 が/\*の 来た方がいい。

cf. 比較：リビングはもっと窓 が/\*の 大きい方がいい

---

<sup>4</sup> 「が」が総記の「が」であるため省きにくいという可能性も考えられるが、主格属格交替の可否では拘束的モダリティと比較の差が出ないということと整合しない。

以上のことから、言語現象によって異なりはあるものの、拘束的モダリティとしての「方がいい」は比較の「方がいい」に比べ1つのまとまりとして固定化の度合いが高く統語的な制限も生じているため、文法化が進んでいると言えるのではないだろうか。先行研究が想定する比較→評価→拘束的モダリティという流れが意味・用法の面からの派生関係だけではないことが経験的にも示せたと言える。

### 3.2. 拘束的モダリティ形式「方がいい」の語としてのまとまり

3.1で見たのは「方がいい」が統語的に1つのモダリティ形式としてのまとまりを持つということであり、そこから「方がいい」が一語になっているという結論をすぐに導くことはできない。言語現象からはむしろ「方がいい」は形態的にも音韻的にも緊密ではなく、語としてのまとまりは持たないようである。

#### 3.2.1. 形態的緊密性

拘束的モダリティの「方がいい」はモダリティ形式であるため外部からの修飾の可否といった形態的緊密性のテスト (Dixon and Aikhenvald (2002)など) を用いるのが難しい。しかし、Mizutani and Ihara (2021)が示しているように「方が」と「いい」の間には他の語 (副詞など) が挿入でき、この点において形態的緊密性は確認できない<sup>5</sup>。

(14) 「方がいい」の形態的緊密性：他要素の挿入が可能  
明日は早く来た方が 絶対に／たぶん／ね いいよ。

また、カバーできる意味は完全には同じではないが「いい」を「まし」「好ましい」などに置き換えてモダリティ形式として用いられることも形態的緊密性 (固定性) の低さともみることができるかもしれない。この場合のタ形にもテンスの対立はないようである。

(15) 何もやらないよりは少しでも勉強した方が ました／?好ましい。

#### 3.2.2. 音韻的緊密性

音韻的緊密性についても検討に用いることのできる言語現象は限られている。少なくとも韻律の点から見ると「方がいい」が音韻的に1つにまとまっているとは考えにくい。「方がいい」はそれぞれの要素間でも前接する述語ともアクセントはまとまらない。

(16) 「方がいい」の音韻的緊密性：アクセント  
寿司はすぐなくなるからすぐに (食' べた) (ほ' うが) (い' い)。

<sup>5</sup> 3.1.2で見た「が」の固定性は形態的緊密性の現れと見なしうるかもしれない。

統語的には節を取るモダリティ形式でも述語とアクセントが独立しているものとまとまるものの両方があるため、統語的な特徴と音韻的緊密性は別に考える必要がある。

- (17) アクセントが述語と独立しているモダリティ形式  
そのプリン太郎が(食'べた)(らし'い)。(cf. 研究者らしい部屋)
- (18) アクセントが述語とまとまるモダリティ形式  
そのプリン太郎が(食べた'っぽ'い)。(cf. 研究者っぽい部屋)

### 3.3. 「方がいい」のまとまり性に関するまとめ

言語現象によってどのくらい根拠として採用できるかは異なるものの、ここまで見てきた「方がいい」の特徴はおおよそ次のようにまとめることができる。特徴ごとのまとまり性は連動しておらず、またそれぞれのまとまり性自体にも程度があるため「方がいい」は一語になっているかそうでないかという形で議論を単純化するのは難しい。

- (19) 拘束的モダリティ「方がいい」のまとまり性
- a. 統語：「方がいい」全体で固有の統語的特徴を持っている
  - b. 形態：低い（確認できない）
  - c. 音韻：低い（確認できない）
  - cf. 意味：構成的に分析可能（Mizutani and Ihara (2021)）

## 4. 省略現象と「た方がいい」としてのまとまり

### 4.1. モダリティ形式と命題部分の省略

本節では小辞残留省略（particle stranding ellipsis）や dependent grafted speech（Sadanobu (2021)）として研究が進められている現象から「方がいい」の特徴を探る。

Sato and Maeda (2019: 361-362)では小辞残留省略が「みたい」のような節を取る要素にも見られるという指摘があるが（cf. Sadanobu (2021: 171)）、モダリティ形式が単独で前の発話を受けられるかどうかは形式ごとの形態統語的性質によって異なる。

- (20) モダリティ形式が命題を照応するパターンの異同（ $\emptyset$ の場合が小辞残留省略）
- A: 明日、太郎練習に来るって？
- a. B: そう/ $\emptyset$ みたいだ/ $\emptyset$ かもしれない/ $\emptyset$ らしいよ。
  - b. B: \*そう/\* $\emptyset$ /そのはず/ようだよ。
  - c. B: \*そう/\* $\emptyset$ /そうするべきだよ。

#### 4.2. 「方がいい」と命題部分の省略

「方がいい」については同じく名詞由来のモダリティ形式である「はず」「よう」に似た振る舞いを見せるほか、「た方がいい」の形式でも受けることができるようである。

- (21) A: この桃、明日 食べる／食べた 方がいいですかね。  
B: その／\* $\emptyset$  方がいいよ。  
B: た／\*る 方がいいよ。

また、先行する発話でル形を用いても「る方がいい」で受けるのは難しい。「方がいい」に接続する述語のル形とタ形の違いについては日本語記述文法研究会編（2003: 103）に出現する文脈の傾向についてわずかな言及があるくらいだが、形態統語的にはタ形の場合「た方がいい」で1つのまとまりになっている可能性が考えられる。タ形の「た」は形態的には語幹との結び付きが強い（接辞である、宮岡（2015）など）一方、音韻的には独立性もある（助詞的である、田川（2021）など）ため「方がいい」とのまとまりを形成することができるのかもしれない。

さらに興味深い現象として、この「た方がいい」で応答する場合、前接する動詞の形態的性質に関わらず「た」が現れるというものがある。

- (22) A: この本も読むべきでしょうか。  
B: た方がいいね。

「読む」はタ形では「読んだ」になるので、この場合の「た」は動詞のタ形から語幹部分を削除するといった分析で導くことはできない。これは具現的（realizational）な形態理論の有用性を支持する<sup>6</sup>。

#### 5. おわりに：まとめと課題

本発表のまとめと今後の課題は以下の通りである。

- (23) 本発表のまとめ
- 拘束的モダリティとしての「方がいい」は比較・評価の「方がいい」にはない統語的特徴を持っている（文法化が進んでいる）
  - その一方、形態的・音韻的には「方がいい」で1つにまとまっているわけではない（一語化はしていない）
  - 「た方がいい」でまとまりになっている可能性がある。

---

<sup>6</sup> 近年の形態理論の発展や分類、特徴については乙黒・田川（2024）を参照。

(24) 今後の主な課題

- a. 「方がいい」のまとまり性や文法化の度合いに関連する言語現象の整理を進める。
- b. 具体的な統語的分析を考える。
- c. Mizutani and Ihara (2021)の分析と統語／形態／音韻的特徴との整合性を検討する。
- d. 省略現象に関する記述・データを整理・検討する。

参考文献

- Dixon, R.M.W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) *Word: A Cross-linguistic Typology*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- グループ・ジャマシイ編著 (2023) 『改訂版 日本語文型辞典』くろしお出版。
- 川端芳子 (2002) 「表現形式と表現意図の対応—シタハウガイイとスレバイイを比較して」『新潟産業大学人文学部紀要』13: 1-16.
- 川端芳子 (2012) 「適当・提案」を表す形式: シタハウガイイとスレバイイについて」『立教大学日本語研究』19: 2-12.
- 宮岡伯人 (2015) 『「語」とはなにか・再考: 日本語文法と「文字の陥穽』, 三省堂。
- 森山卓郎 (2000) 「I 基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』, 1-78, 岩波書店。
- Mizutani, Kenta and Shun Ihara (2021) *Decomposing the Japanese Deontic Modal hoo ga ii. Japanese/Korean Linguistics*. 28. CSLI Publications.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』, くろしお出版。
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』, ひつじ書房。
- 乙黒亮・田川拓海 (2024) 『形態論の諸相 6つの現象と2つの理論』, くろしお出版。
- Sadanobu, Toshiyuki (2021) Is discourse made up of sentences? Focusing on dependent grafted speech in modern standard Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 37: 151-180.
- Sato, Yosuke and Masako Maeda (2019) Particle stranding ellipsis involves PF-deletion. *Natural Language and Linguistic Theory* 37: 357-388.
- 申鉉竣 (2006) 「日・韓両言語における「必要」を表す評価のモダリティ形式について—「といい」、「ばいい」、「たらいい」、「方がいい」を中心に」『日本エドワード・サピア協会研究年報』, 20: 85-96.
- 田川拓海 (2021) 「形態論・活用論から見る「した」」庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2 「した」「している」の世界』, 1-19, ひつじ書房。
- 高梨信乃 (2002) 「第3章 評価のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』, 80-120. くろしお出版。